

ポレーシエチェルノブイリにおもいをよせて

チェルノブイリ救援・中部 事務局から '90. 7. 16 NO. 2

緊急提案//ソ連代表派遣//

<その1>『ネクスト・ストップ 被爆者ツアー』参加の件

期間 8/28~10日間 目的地 キエフ

企画者 大阪外大生(ロシア語)高橋純平さん

これは、ヒロシマ・デーにキエフから若者グループを招き、ホームステイしながら反核・反原発の交流(浜岡でも予定)をする企画に対して、逆に日本から被爆者・医師・その他市民がキエフを訪れソ連家庭でホームステイするツアーです。

この話は、7/3、京都でのニキ・グラタウアー氏講演の日、案内を入手、また他からも情報が入り、7/7夜の、広河氏講演会後の交流会の場で参加を具体的に検討、申し込み期限(7/10)の関係もあって、参加可能な人に至急に当たることになりました。

<その2>ウクライナ・ジトミール州より返信来る!「救援要請、代表受け入れ用意有り」

<その1>のツアー参加を検討中、待ちに待った救援中部の手紙に応じて、7/10、『ジトミールスキー・ヴィスニーク』(ウクライナ・ジトミール州の地方週刊誌)の編集長名で返事がきました。

「感謝を込めて救援を受け入れる。被災者との窓口になれる。日本からの代表2~3人(もしくはそれ以上)受け入れる用意有り」旨、その他具体的に必要な医療器具、医薬品が明記されています。

提案1. この正式要請に応えるべく、救援金、救援物資などを募るキャンペーンをマスコミを通じて、広く、各方面に呼び掛ける必要があるのではないか。

提案2. 代表派遣を、<その1>のツアーに乗っかっていくのか、独自で、体制を整えて取り組むのが良いか。(通訳を頼む必要有り)

ウクライナからの手紙（抄訳）

1990. 6. 27

こんにちは、チェルノブイリ救援・中部のみなさま

私たちの編集部で興味と感謝を込めて手紙を読みました。そして、関係のところへ話し、問い合わせました。

私たちの週刊誌は、ウクライナジャーナリスト連合に所属しています。私たちも、毎号、チェルノブイリ原発事故による放射能の問題、事故対策を取り上げています。私たちは、社会意見を述べるだけでなく、できるだけ具体的な対策を試みています。

私たちの週刊誌は、“ジトミール州汚染地域から住民を安全なところへ移住させる”という、ボランティア・チャリティ基金を募っています。これは、個人やさまざまな政治、宗教団体が参加しているものです。この基金は、住宅、病院、子供の施設のために使っていて、強調しますが、他のことには使っていません。基金の情報も、特別紙を発行するなど、公開しています。

第2の質問（汚染状況）には、残念ながら完璧には応えられません。

全てのウクライナと白ロシアの汚染状況についてはわかりません。公式ではない情報を送ります。

ジトミールに関して、ソ連政府は、12の村の人々は至急に移住しなければならないといっているが、私たちの情報によると166の村が移住しなければならないとなっています。

特別医学管理が必要とされる被害者は、ジトミール8区で40万2000人、子供は11万2000人です。

これらの人々の大部分は、甲状腺、目の病気、呼吸器など様々な病気に犯されています。

それゆえに、感謝を込めて皆さんの援助を受け入れます。

第3の質問に（必要なもの）医療装置

大人用胃カメラ（オリンパス）	9台
超音波スキャナー（アロカ）	2台
小児用胃カメラ（オリンパス）	9台
新生児用保育器（アトム）	9台

きわめて必要な医薬品リスト（同様なものならよい）

1. エッセンツィアール（アンプル、カプセル）…ユーゴスラビア
2. レガロン（錠剤=胃薬）…ユーゴスラビア
3. パンクレアチン…フィンランド

4.

32.

第4の質問に、今、ジトミール市に100人収容の小児用甲状腺病の医療サナトリウムが完成しつつありますが、ここの医療装置が整えば、市民は感謝することでしょう。

もちろん、私たちはあなたたちと被災者との救援の仲介者になります。お金や物の受け渡しの確実な保証をします。私たちはそういう経験もあり、情報公開もし、社会の支持を受けています

私たちはあなたたちから2~3人、1~2週間受け入れる用意があります。必要に応じて人数、期間を増やすことも可能です。ホテルの宿泊も用意できます。ジトミール州のどこでも、ウクライナの首都キエフでも案内できます。

私たちの被害に対して、あなたたちの同情に心から感謝します。あなたたちの活動や優しさに頭を下げ、これからの協力に期待します。

深い尊敬を込めて

ヴァレーリ・ニチポリェンコ（編集長）

『ジトミールスキー・ヴィスニーク』代表

チェルノブイリ救援・中部（連）0562-83-6521 戸村

郵便振替 名古屋 8-108610

0568-79-1080 関本（昼）

事務局会議から

- 6/4
第4回
- * チェルノブイリ救援・中部の活動費をどうするか……いろいろ意見が出ましたが、パンフレット制作費、事務費など、救援活動にお金は必要であり、寄せられた救援金の数パーセント（必要に応じて）は経費に当て、その旨、パンフレットや領収書で断る。
 - * 街頭募金をおこなう
 - * 「チェルノブイリの子供たち」の絵画展をやったらどうか（プロジェクト・チームで検討）
 - * チェルノブイリ救援のパネルをつくる（プロジェクト）
 - * パンフレット（資料用）作成プロジェクト
- 6/18
第5回
- * 『広河さん講演会』・『救援活動』について、各方面に広く宣伝活動を行う
 - * ソ連から帰国の藤田祐幸氏の報告によると、「ソ連現地の様子は混沌としていて、息の長い取組が必要」とのこと
 - * 広河隆一さんからの要請もあり、“チェルノブイリのもたらした被害に私たちはどう向き合うのか”を話し合う。次回も引き続き議論を深める
- 7/2
第6回
- * パネル（10枚1セット）完成……各地に貸し出す
 - * 前回に引き続き、放射能被害について話し合う
 - ・ 『障害』を持つ人が、生きにくい社会であってはならない
 - ・ 『奇形』『異常』などの表現はしない……具体的にいう（手のない、目の見えない、足の多い、2倍の大きさの葉など）
 - ・ 被害は、形に現れているものばかりではなく、例えば、松が松でなくなつてしまった、魚が住めなくなった川、人々が大切にしてきた土地が汚染させられてしまった悲しみや住み慣れた家から避難する嘆きなどにも思いを寄せたい
- 以上のような問題提起ができればよいのではないかと